

三歳の差だね七月十日まで二月八日はきみの誕生日  
長嶺元久

満年齢で数えると、二月八日から七月十日までの約五か月の間だけ夫婦間の年齢差は三歳、ということになる。結婚四十年の祝賀の晩餐の五首中の一首だが、数詞を多く使って、祝賀の空気にふさわしい楽しい作にしあげている。しゃべり言葉を入れて、くだけた雰囲気を出している。

冬の富士真白き影のそのふもと亡き子納めし霊園の  
あり 野見山鈴子

東京から富士山を遠望しているのだろう。富士山を見つつそのふもとにある亡き子の御墓を想起している作。上句、遠くから御墓を思う思いの筋道が、読む者にも説得力をもつて伝わってくる。

嫁らしきことをせざりし日を重ね手の冷たさを喜ば  
れおり 倉石理恵

母を介護する一連。この一首の上句、過去の長い歳月を表現してなかなかの表現と思う。熱が高い母なのだろう。それを受けての下句、じつに簡潔に、控え目に、自身を位置づけていて見事である。

ひ孫らに大きばあちゃんと呼ばれている母は年々小さ  
くなりて 安仁屋洋子

一読、じゃれのようなでありながら、じつさいを思い浮かべれば、言葉だけの世界ではないことが分かる。ひ孫たちが、「大きばあちゃん。大きばあちゃん」と呼んでいる声が読者に聞こえるからである。

武骨なる手動鉛筆削りより富士の稜線のごとき鋭角  
武富純一

鉛筆削り機で削られた鉛筆を表現して「富士の稜線のごとき鋭角」とした意外性に注目。大きさの対比、色や材質の差異を大きく越えてあつげらかんとしているところが持ち味。

窓に向かひ二十四時間営業のフィットネスクラブに  
走る人あり 荒井公子

二、三、四句が挿入句になっているめずらしい一首。つまり第一句「窓に向かひ」は、結句の「走る人あり」に直接つながっている。めずらしい形なのに一読しただけではそうとは感じられないのは、「二十四時間営業のフィットネスクラブ」という、広告や案内の定型に私たちがすっかり馴れきっているからだろう。言葉に敏感な作者だからこそその一首。

週末をテニスコートで過ごすとき吾は幾たびも飛行  
機を見る 柴山与志朗

この歌の次の作「飛行機でどこか遠くへ行ったいと毎週同じことを思えり」と、対になっている一首と読んだ。テニスコートの上空が、定期航空の進路になっているのだろうか。

底より浮かび上がりて白き鯉ライトアップの青を  
揺らめく 清水あかね

一読、結句は「揺らめかす」とあるべきかと思われるが、よく読むとこのままで、青いライトの中をゆらめく、と読むことが可能だと思えてくる。